

認知的方略と自尊心・完全主義・ セルフハンディキャッピングの関連について

○宮前奈央子¹・井清水裕士²・中島健一郎¹

(¹広島大学大学院教育学研究科・²関西学院大学社会学部)

研究の目的

本研究の目的は、認知的方略と自尊心・完全主義・セルフハンディキャッピング(以下 SH)の関連について検討することである。光浪(2012)によると、認知的方略は過去のパフォーマンスに対する認知(過去認知)の高低と将来のパフォーマンスに対する期待(将来期待)の高低によって4つに分類される。過去認知、将来期待ともに高い方略的楽観主義(SO)、過去認知は高いが将来期待は低い防衛的悲観主義(DP)、過去認知は低いが将来期待は高い非現実的楽観主義(UO)、過去認知、将来期待ともに低い真の悲観主義(RP)である。認知的方略の研究では、DP者、UO者及びRP者はSO者に比べて顕在的自尊心が低いこと(清水・中島, 2018)、完全主義とDPに正の相関があること(RoyChowdhury, 2016)、SO者とDP者はSHを採用しない一方、UO者とRP者はSHを採用すること(光浪, 2010)など、様々な観点から行われた研究が存在する。しかし、4つの認知的方略との関連を検討した研究はあまり多くは見受けられない。また、近年心理学領域では再現性問題について関心が高まっている(友永・三浦・針生, 2016)。これらを踏まえ、本研究では認知的方略と自尊心・完全主義・SHの関連について検討する。

方法

調査参加者 大学生122名(男性35名, 女性87名, 平均年齢19.45歳)であった。

手続き Qualtricsを用いた一斉教示・個別回答による集合調査であった。

使用した心理尺度 認知的方略の分類にはHosogoshi & Kodama(2005)のJ-DPQ(11項目)を用いた。また自尊心の測定には山本・松井・山成(1982)による自尊心尺度(10項目)、完全主義の測定には福井・山下(2012)の自己志向的完全主義尺度(20項目)、SHの測定には沼崎・小口(1990)のセルフ・ハンディキャッピングスケール23項目版(以下SH23)から因子負荷量が.40以下の項目を除外した11項目を使用した。全ての尺度について5件法で回答を求めた。

結果

まず、先行研究(清水・中島, 2018)に基づき、認知的方略の分類を行ったところ、SO者43名、DP者36名、UO者11名、RP者32名であった。

次に、自尊感情得点に対して一要因分散分析を行った結果、認知的方略の主効果が有意であった($F(3,118)=29.53, p<.001$)。Holm法を用いた多重比較の結果、SO者はDP者・RP者・UO者に比べて(DP: $t(118)=6.02, p_{adj}<.001$, UO: $t(118)=3.54, p_{adj}=.002$, RP: $t(118)=9.14, p_{adj}<.001$)、DP者・UO者はRP者に比べて自尊感情が高いことが示された(DP: $t(118)=3.18, p_{adj}=.006$, UO: $t(118)=2.68, p_{adj}=.017$)。同様に、完全主義得点に対して一要因分散分析を行ったところ、認知的方略の主効果が有意であった($F(3,118)=9.11, p<.001$)。多重比較の結果、DP者・RP者はSO者に比べて完全主義傾向が強いことが示された(DP: $t(118)=-3.33, p_{adj}=.006$, RP: $t(118)=-5.09, p_{adj}<.001$)。さらにSHに対しても一要因分散分析を行ったところ、認知的方略の主効果が有意であり($F(3,118)=7.37, p<.001$)、多重比較の結果、DP者・RP者はSO者と比べてSHを採用しやすいことが示された(DP: $t(118)=-2.78, p_{adj}=.031$, RP: $t(118)=-4.62, p_{adj}<.001$)。

考察

DP者・RP者はSO者と比較して完全主義傾向が強いという結果は概ね先行研究(RoyChowdhury, 2016)と一致する。またSO者はDP者・UO者・RP者に比較して自尊感情が高いという結果は先行研究(清水・中島, 2018)と一致する。一方でDP者・UO者がRP者と比較して自尊感情が高いという結果は先行研究と一致しない。自尊感情に関して4群に分けて検討した研究はあまりないため、UO者とRP者の自尊感情に関しては今後の知見の積み重ねが必要である。さらに、DP者・RP者はSO者と比較してSHを採用しやすいという結果は先行研究と一致しなかった(光浪, 2010)。尺度の信頼性が低かったため、結果に影響したと考えられる。